



Title	腰椎および踵骨骨量の加齢変化と閉経との関係：横断および縦断的調査による検討
Author(s)	中田, 朋子; 石井, 伸子; 伊東, 昌子; 江島, 英理
Citation	長崎大学保健管理センター概要 . vol.11, p.144-144; 2001
Issue Date	2001-03-02
URL	http://hdl.handle.net/10069/5328
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-26T16:48:39Z

腰椎および踵骨骨量の加齢変化と閉経との関係

—横断および縦断的調査による検討—

長崎大学保健管理センター 中田 朋子 石井 伸子
長崎大学医学部放射線科 伊東 昌子
長崎大学医学部内科学第一 江島 英理

【目的】

女性骨量の加齢変化と閉経との関係を腰椎DXA法と踵骨QUS法で横断的調査と縦断的調査を行い、比較検討した。

【対象と方法】

年1回実施している骨粗鬆症検診を1996-1998年の3年間で2回以上にわたり受診した女性職員164名(42.3±10.6歳)を対象とした。測定は腰椎DXA(Lunar, EXP-5000)でL2-4BMDを、踵骨QUS(Lunar, Achilles+)でstiffnessを測定した。測定初年時の年齢を基準として、対象群を20歳代、30歳代、40歳代、50歳代の4群に分け、加齢変化を検討した。また、対象群を閉経前、閉経後5年以内(5YAM)、閉経後6-10年(10YAM)の3群に分け、期間中に閉経を迎えた者は5YAMに含めた。3年間の縦断的調査では、測定初回時と最終時の測定値より年間変化率を求めて、検討を行った。

【結果】

初回時の測定値で横断的調査をしたところ、いずれの測定法でも20-40歳代に比べ50歳代の群が低値を示した。閉経の影響については、閉経前群に対して5YAMおよび10YAM

の骨量は低値を示し、5YAMと10YAMの間では有意差を認められなかった。閉経後経過年数(YAM)との骨量との関係をみると、5YAMでは負の相関がみられた。次に縦断的調査では、年間変化率の加齢変化はばらつき(SD)が大きく、統計上有意な変化はみられなかったが、年代別に2つの測定法を比較すると、40歳代でstiffnessの減少率はL2-4BMDより有意($P < 0.05$)に大きかった。閉経による影響をみると、閉経前群と5YAMを比較したところ、stiffnessの減少率は有意に($P < 0.05$)大きく、L2-4BMDでは変化がみられなかった。しかし閉経前群の40-50歳代のみを5YAMと比較すると、L2-4BMDの減少率は5YAMで有意に($P < 0.05$)増大し、stiffnessでは有意な変化はみられなかった。

【結論】

3年間の縦断的調査の結果、L2-4BMDでは閉経による影響が大きく、閉経後5年以内の減少が明らかであった。stiffnessは閉経前群でも40歳代からの骨量の減少が認められた。

(本論文の要旨は第1回日本骨粗鬆症学会で発表した。)